



転生しちゃったよ

ヘッドホン侍
Headphonesamurai

いや、
ごめん

5

▲ ジョーン=ヴェリトル

ウィリアムスの教育役。
美形でDS。研究バカ。

シフォン ▲

犬の獣人で、元『影』の少女。
ウィリアムスの専属メイドと
なるべく修業中。

▲ ユカリス

エルフの里で暮らす、
セフィスの幼なじみ。

▲ サン

ウィリアムスの親友で、
学園寮のルームメイト。
天然。

リリィ ▲

ウィリアムスの母で、
もち肌の美人。親バカ。

▲ キアン=ベリル

ウィリアムスの父。
エイズーム王国の
騎士団長を
務める。親バカ。

▲ セフィス

エルフの少女。
ウィリアムスの同級生。
少しおバカなところがある。

▲ ウィリアムス=ベリル

前世の記憶を持ったまま、
名門貴族ベリル家に転生した
本作の主人公。

1

俺——ウィリアムスⅡベリルが談話室で同級生のサンとセフィスとともに雑談していると、セフィスが膝^{ひざ}をたたきながら声を上げた。

「あたしが飛び級するつもりって書いた手紙を、召喚獣のリリスちゃんに届けてもらったのよ。したらね、お爺さまったら『あのセフィスが飛び級じゃと!? わしが生まれてからも経験したことのないほどの大災害が起きるぞ。おそろしや』とか言ってたんだって！ ありえないよね！ ほんと、孫をなんだと思ってるんだっての」

ぶんすか怒っているセフィスには申し訳ないが、その発言には苦笑を禁じえなかった。思わずサンと顔を見合わせてしまう。

セフィスはエルフの里にいる頃からちょっとアホ……じゃなくて、ズレれた発言をしていたのだから。うん。想像つく。今もたまに言語怪しいときあるしな。

日本の高校生から転生して八年、通算して中身二十五歳の俺からすると、セフィスは幼くて未熟というレベルじゃなくて、どうも抜けている。

サンも変なやつであることには変わりないものの、彼の場合は言葉のミスとか知識による問題じゃなくて、行動がおかしいだけだ。いや、それはそれで問題なのだが、地頭は悪くない。とりあえず天然ボーイなだけなのである。

うん、セフィスとは決定的に違うんだよな。どこがどうとは言わないけど。

でもセフィスは里を出るまですっと、妖精たちの「雑談」という名の騒音に悩まされていて、日常生活を送るのも大変だったというからな。お爺さまのその反応は、当時のセフィスの印象からきているもののだろう、きつと。たぶん。そうであって欲しい。

「……あ、えっと、セフィスのお爺さまが生まれてからって……お爺さまもエルフだよな？」

気づかぬうちに俺は遠い目になっていたらしい。セフィスに訝^{いぶ}しげな視線を向けられてしまったので、俺は慌てて話題の転換をかねて質問をした。

「うん。今、二百歳くらいになるんじゃないかな」

セフィスが俺の意図に気づいたかどうかは分からないが、彼女は小さく首を傾げると顎^{あご}に指を当てながら答えてくれた。

二百歳くらいって。桁が違った。さすがエルフ。

俺のファンタジーなイメージを裏切らなかった。

俺は一人妙に納得していたのだが、そこで突然、声が上がった。

「二百歳!？」

普通は驚愕^{きやうがく}に値するものであったらしい。未だにエルフ族は他種族との交流が浅いからかな、サンが声を裏返らせて、座っている椅子から器用に飛び跳ねた。

おい。だからその動きどうなってるんだっての。

なんでそんなギャグ漫画じみた動きができるんだ。物理法則無視してるよね？ サン君。

いや、そもそも、この世界には魔法なんてものがありましたね。物理法則とかさよならグッバイだったよ。火の玉とか召喚とか、どこから出てきてるんだって話だよな。質量保存の法則とか涙目で全力疾走していくのが目に浮かぶわ。

って、ちよっと待てよ。

もしや、サンはその動きをするために魔法を発動したのか!? そんな気配はなかったぞ。まあ、発動していてもいなくても、ある意味天才だよ。役に立たないから超無意味だけど。

お兄さん、君が不思議すぎるよサン。きつとこれは考えちゃいけない問題なんだな……。

真面目に答えを出そうとしたら、思考の渦^{うず}にハマッてしまいそうなサンの不思議な動きに気を取られているうちに、いつの間にか二人はお爺ちゃん話で盛り上がっていた。

「うちの爺ちゃん^{おや}は魔道具職人でさあ、まあもう引退してるんだけど。『歳とって歯とアゴが弱くなってきたわい』とか言って、自動で噛み砕いてくれる機能をつけた入れ歯の魔道具を作るからって、ここ一週間くらい工房にこもってたらしいんだよね」

「うんうん、それで？」

セフィスがわくわくした表情で相槌^{あいづち}を打つが、会話に途中参加した俺も続きが非常に気になる話だった。

爺ちゃん……妙なところに魔道具を使おうとするな。

魔道具って相当高いじゃないか。入れ歯の魔道具作るとは。

前世で言ったら、最新鋭のパワードスーツのAIシステムと技術を惜しみなく組み込んだ総入れ歯です！ って、メカニカルな白い歯をニカッと光らせて笑顔を向ける感じじゃないか、それ。

「でき上がって喜んでつけたはいんだけど、なんか失敗してたみたいで。ずーっとガチガチと連続で歯が動き続ける欠陥魔道具になっちゃったんだって。それだけならまだいいんだよ？ 魔道具に失敗はつきものだから。でもね、爺ちゃんったら『こうなったら意地じゃ』とか歯をガタガタさせながら言ったらしくてさあ」

「どうなったのよ！」

結末を待ちきれないといった様子で、セフィスがサンに詰め寄った。

俺もうずうずして待っている。

さあ、どうなったんだ爺ちゃんの歯とアゴ！

「うん、爺ちゃんったら結局『うむ。アゴの筋肉が鍛えられたみたいじゃ！』とか言って、魔石取り外してただの入れ歯にしちゃったんだ。で、干し肉とかを普通に食べてるんだって！」

爺ちゃん！ もはやそれアゴのトレーニング機じゃないですかー！ 何作ってんですか！

これには思わずアゴが外れるかと思うくらい笑った。アゴつながりだな。……はい、ごめんなさい。嘘です。せいぜい、頬がびくびくするくらいでした。

それにしても、祖父かあ……。

と、自分の祖父について考えようとして、はたと気がついた。俺、転生してから祖父という存在に会ったことないわ。話を聞いたこともない。

もしかして、すでにご臨終なされちゃったりするのだろうか。

それで両親が俺に言っていないのなら納得だが、聞かない俺も俺だよな。

気づいた瞬間に物凄い後悔の念に襲われる。

俺ってば、前世では爺さんにめちゃくちゃ世話になったのに、孝行もできないうちに逝^いかれてしまつて。だからもし生まれ変わって今度そんな機会が訪れたら、恩は早めに返そうと思っていたのにな。いざ転生してみたら、その存在を確かめることすらしていないなんて。

せっかくの記憶の持ち越しを、いつも上手く使えない。

まったく、俺はバカヤローだな。

前世の爺さんのことを忘れることなど決してできないけど。

もしかしたら俺は、今世の爺さんで前世の爺さんを上書きしたくないと、俺の爺さんは前世の爺さんただ一人なのではないのかもしれない。無意識に考えないようにしていたのかもな。

それくらい、あの爺さんとの思い出は大切なのだ。

今の俺を作る、その思い出は。

楽し気に自分たちの祖父の話で盛り上がるサンとセフィスをよそに、俺は今となっては遠い過去に思いを馳せていた。

「それでね……ちよつと、ウィル聞いているの？」

セフィスの声でハッと意識が戻る。意識を飛ばしていただけに何も言えない。こういうときはこうである。

「ごめん、聞いてなかった」

てへぺろ、と笑いながら謝る。

セフィスは「もうー！」と声を上げながらも、仕方ないといった表情で笑っている。サンも呆れ顔をしながら微笑んでいた。

2

「何しとんじゃ、お前……」

もうじき六十歳を迎えるであろうという老人が、呆れた声でそう言った。

後ろから声をかけられた少年は、ビックリと肩を跳ねさせる。そして、恐る恐るといった様子で振

り返った。

「い……いや、そのう……」

少年は言い訳しようとするが、呆れた顔で少年を見る老人と目が合い、結局それは言葉にならずに尻すぼみになってしまった。

少年はこの間、どこのハエを追っているのかというレベルで視線をさまよわせているのだが、幸い、その様子は端からは見えなかった。なぜなら、少年は――

「サングラスにマスクとか、完全に不審者じゃねえか……通報されても知らねえぞ」

老人は肩を落として、深い溜息をついた。

そう、ランドセルを背負って学校から帰ってきた少年――自分の孫が、顔半分を覆い隠すほど大きなマスクにサングラスという格好をしていたのだ。呆れて怒る気にもならない。

それに、老人には少年がこんなことをしている理由に、おおよその見当がついていた。結局自分は少年の力になれていないのだということが分かってしまって、気落ちする。

そして、何より少年の発想は毎度のことながら斜め上過ぎて、怒るよりも脱力してしまうのだった。「いや、克夫さん。通報はされませんで。僕は大きく見られてもせいぜい小学四年生ですから、誰かが目撃しても子供の遊びだと思っただけですよ」

老人――克夫が溜息を吐いているうちに、気持ちを立て直したのだろう。さっきまでビクビクしていた少年が、やけに理知的な台詞を返してきた。おまけに、サングラスを学者よろしくクイッと

指で動かすポーズつきだ。

——これで小三だもんなあ……。

克夫はトホホと泣きたくなってきた。突然姿をくらました自分のバカ息子はどこで何をやっているのか知らないが、もし目の前に現れるようなことがあったら、一発と言わず完全に伸びきるまで殴り続けるに違いない。降参のタツプをされても気がつかないフリをするだろう。

もうずっと顔を見せていないバカ息子に呪詛^{しゅそ}を吐きながらも、まあ孫だけでもそばにいてくれるのは幸せだと、何とか現実を受け入れる克夫であった。

「中学生になっても、それをそのままやる気かよ、翔^{しょう}」

「……あつ」

溜息交じりにそう言うと、克夫の孫、翔は声を漏らした。

どうやらそこまでは考えていなかったらしい。こんなところを見ると、まだ子供だと安心する。目の前のことに必死なのが子供だ。将来がなんだと頭を悩ませるのは、もうちょっと大人になってからでいいのである。

自分が翔くらいの年齢のときは、イタズラし放題で大人を困らせていた。

子供はイタズラでも何でもして、鼻水たらして遊んでいればいい。

少なくとも克夫はそう思っていた。

「で、なんでそんなことをしてんだ？」

克夫は廊下を歩きながら尋ねた。翔は克夫の後をサングラスとマスクをしたまま、ついてくる。

「……びよ、病気の予防です」

ずいぶんと間を空けてから震える声で返ってきたのは、そんな答えであった。克夫は後ろにいる翔には見えないことを分かった上で、苦虫を噛み潰したような表情になった。

「こりゃあ、相当重症だなあ」

克夫は誰にも届かない小さな呟きを、かすれた声で漏らした。



翔の母親が死んですぐ、彼の祖父と名乗る男性が1LDKのボロアパートにやって来た。

母を亡くして呆然としているうちにあれやこれやと世話を焼かれ、翔が気がついたときにはもう、その男性の家に一緒に住むことになっていた。男性の名は克夫というらしい。

翔は生まれてからその時まで、一度も父方の祖父である克夫に会ったことはなかったから、勝手に祖父はもういないものだと思っていた。だから、突然現れたその人は、翔にとって祖父というより遠い親戚のように感じられた。

最初は不安で仕方なかった。しかし克夫は口は悪いものの、常に翔を気遣ってくれる。それに翔の母親とは違い、翔の醜い顔を見ても嫌な顔一つしない。とても優しい人だった。

克夫は翔の顔など気にしないと分かったが、普段から平然としていられるかといえば、話は別だ。母に「その顔が憎い」と言われたあの日から、顔なんてないものとして生きていこうと決心した。しかし、どうあがいても顔はついているものだし、その身から離すことはできない。いくら努力しても、のっぺらぼうにはなれないのである。

どれほど顔以外の面を見てもいたくても、他人にまず映るのは顔なのだ。

だから仕方なしに顔を隠す方法をとってみたのだが、やはり克夫には呆れた視線を寄越されてしまった。確かにこれでは中身を見てもらう以前に、不審者と思われるに決まっている。

克夫に指摘されて初めてそのことに気づいた翔は、マスクを外しながら赤面していた。前を歩く克夫は呆れてこそいたが、翔を馬鹿にした様子はなかったし、何より翔に無関心でなかったことが嬉しかった。

怒りでも呆れでもいい。

家族に何かしら反応してもらえらってこんなに嬉しかったんだ、とサングラスをかけ直しながら翔はにっこりと笑った。

そこでちょうど廊下が終わり、克夫が右側の扉を開けた。そこは、畳敷きの部屋の真ん中にコタツが設置されているという、典型的な和風のリビングだ。

コタツの上にはみかんが置かれており、前にはテレビがある。

これまで家事と勉強漬けの毎日を送っていた翔は、この部屋で初めて娯楽というものを覚えてし

まった。コタツにみかんって最高だ。休日にテレビを見ながらダラダラと過ごす時間は想像以上に幸福だった。

それと、翔の父が残していたという小説やゲームにも大いにはまった。小説を読んでいると時間を忘れてしまつて、たまに夕飯の準備が遅れそうになることもある。といっても、さすがに間に合わなかったことはないが。

家事は翔が行うと自分で言ったのだ。よくしてくれる克夫に、少しでも感謝の気持ちを伝えたい。そう言つて克夫を説得すると、本人には微妙な表情をされてしまつたが、克夫はいつもご飯を食べると美味しいと褒めちぎってくれた。それがまた翔には嬉しかった。

そんなことを考えていると、リビングの入口で立ち止まってしまつていたらしい。克夫が不思議そうな顔で見てきた。

「何でもないせん」

翔は苦笑すると歩き出した。



背負っていたランドセルを部屋に置き、さっさと宿題を済ませる。リビングの奥に四畳ほどの個室があつて、そこが翔の部屋としてあてがわれた。克夫は学習机と本棚を買つてそこに置いてくれた。

翔は家に帰ると、いつもルンルンで学習机に向かっていた。宿題はすぐに終わってしまうし、小学校の学習内容はとくに終えてしまっていたから、翔が机でやることと言えどもっぱら読書だったが、『学習机』という名前なのに学習に使わないなんて、とちよつと申し訳なくなる翔だった。

宿題を終えた翔は、早速コタツにもぐりこんだ。すると、玄関の開く音が聞こえてきた。どうやら、今日は克夫が早く帰ってこられたみたいだ。

克夫は職場で頼られているらしく、夕方の定時で帰って来ることはほとんどない。一度克夫に連れられて家にやって来た職場の人が、「克夫さんって本当にすごいんですよ」と翔に教えてくれた。その男の人は本当に克夫を尊敬していて、そんな尊敬される人が自分の祖父だと思つと翔は誇らしかった。自分も将来は尊敬されるような人間になりたいと、そのときから人生の目標にしている。その克夫が珍しく早く帰って来て家にいるものだから、翔は内心とても喜んでた。

二人並んでコタツに入ってテレビを見ていると、しばらくして唐突に克夫が口を開いた。

「なあ、翔」

「はい？」

「お前は、その……いや、うん。俺は今日、『たまには早く帰って休んでください！ 身体でも壊したら大変ですから』って部下の娘っこに怒られちゃってな。確かに前の俺だったら、夜遅くまで会社で過ごしたら、そりゃすげえ大変だったのよ。でも最近は別に無理してるわけでもねえからよ、なんでもかなくて考えたら、お前がいてくれるからなんだなと気づいてな」

克夫は最初、何か他のことを言いたかったのではと気になった翔だったが、後半の台詞でそんなことはどうでもよくなった。翔は拳を握って、感動にプルプルと震えてしまう。

『お前がいてくれるから』

克夫のその言葉が、何度も頭の中で繰り返される。

役に立っているんだと、ここにいていいんだと実感し、嬉しかった。今までの努力が報われたような気がした。

「……と感謝して……っておい!? どうした翔!」

知らぬ間に、感動のあまり涙がこぼれ出てしまっていたらしい。

はらはらと涙をこぼす翔に気づいた克夫は、慌てて翔を宥めようとする。気遣わしげに、でも不器用に背中をポンポンと叩かれて、ただでさえ涙腺が緩んでいた翔は、涙が止まらなくなってしまった。

——必要とされてるんだ。

本当に嬉しかったのだが、涙腺を使うのが久しぶりだったからか制御できなくて、どんどん激しくなってしまった。

しゃくりあげて泣いているうちに、いつしか泣いている理由が分からなくなって、でもなぜか泣けてきて、どうしようもなくなった。

翔はとうとう泣き疲れて眠ってしまったが、最初は焦っていた克夫も途中からは落ち着いて、ずっ

と翔の背中を撫でていた。それが余計に翔の涙腺を刺激したのだが。その日、翔は人生で初めて、泣き疲れて眠るという経験をした。

3

気がついたとき翔は、部屋の布団で寝ていた。外では小鳥がちゅんちゅんと鳴いている。この底冷えするような寒さは朝の空気だ。

ぼーっとしていた頭が覚醒するにつれて、昨日の記憶がよみがえってくる。そして、翔は顔面蒼白になった。地面がなくなったかのような気分である。

——泣き疲れて眠ってしまったんだ。

せっかく役に立っていると言われたばかりだったのに！これでは克夫に呆れられてしまう。

翔はまた泣きそうになったが、それでは昨日と一緒だと歯を食いしばって涙をこらえた。

泣きすぎたせいで、まぶた瞼が腫れぼったい。じんわりとにじ滲んだ涙がしみたが、無視してさっさと布団から出て着替えると、顔を洗った。水道から出てきた水は痛いくらいに冷たい。けれど、今はちょうどよかった。

そして台所に向かう。リビングの奥にある翔の部屋はちょうど、同じくリビングに面する台所の

隣にある。

朝ご飯には味噌汁と焼き魚を作ろうと思ったが、今日はご飯が炊けていないことに気づいた。いつもは寝る前に朝炊けるように炊飯器を予約しているのだが、昨日は泣き疲れて寝てしまったからだ。

「仕方ないか……」

翔はそう呟くといそいそとコートを着て、家を出た。朝ご飯はパンにしよう。そう思い、近くのコンビニに向かった。



「翔……！どこ行ってたんだてめえっ」

翔が家に帰るなり、玄関先にいた克夫に怒鳴られながら抱きつかれてしまった。

「えっ……かつ克夫さん？」

翔は困惑して声を裏返らせる。自分は何かしでかしてしまったのだろうか。

そこまで考えて、自分が出かける原因となったことに思い当たった。今日はまだ朝ご飯を準備できていないのだ。顔を青くした翔は、反射的に謝っていた。

「ごめんなさい！」

「なんで謝る？」

しかし、克夫は抱きしめていた腕を離すと、翔を見つめて真剣な顔でそう言った。翔はさらに不安になった。

このままじゃ、僕は捨てられてしまう——そう思ったのだ。

「朝ご飯を用意できなかったから……」

震える声でそう告げると、克夫は一気に顔色を変えた。

「来い」

外を歩いて冷たくなった翔の手を握り、克夫は強引に翔を家の中に引っ張っていった。

「どこ行っただんだ？」

克夫は翔を無言で連れていくと、リビングに入ったところで口を開いた。

「……朝ご飯用に、パンを買いに行っていました」

「そうか……いきなり怒鳴って悪かった。でも、頼むから何も言わないで家を出て行かないでくれ」

——家出して、そのまま帰って来ないのかと思った。

昨日あんなことがあった矢先にこれだ。本当に肝が冷えた。

朝起きたら、昨日泣き疲れて眠ってしまったはずの翔の姿がなくなっていたのだ。

克夫には、翔が泣いた理由は分からなかったが、涙を流しているのにひどく嬉しそうだった。そ

んな幸せそうな表情を引き出せて喜んでいたのに、突然姿を消したのである。

思えば、翔は我がままも言わないし、それどころか、いかにして克夫の役に立つかということばかり考えて日々を過ごしている。

克夫には、そのことが歪よこしまに思えた。

それはまるで、悪いことをしたら捨てられてしまう、と行動で語っているようで。

昨日の失態で、翔は克夫に嫌われたと思ったのかもしれない。

子供は我がままを言って大人を困らせるくらいでいいのだ。大人はそれを許して子供を育てる。

それは克夫にとっては本当に当たり前で普通のことだったから、翔はそう思っていないということに、今の今まで気づかなかった。

それだけ翔が、その年齢に見合わない気配りをしていたということである。

そして何よりも。

翔ときちんと腹を割って話していなかった克夫にも責任がある。この孫の父親である克夫の息子を、一応は育て上げたのだから、どうにかなるという自惚うぬぼれが心のどこかにあったのかもしれない。母親を亡くしたばかりで、思い出させるのは酷だろうと以前の生活の話題を避けてきたつもりでいたが、実は放置していただけではないか。

克夫はそのことに気づいて、胸が張り裂けるような思いがした。

保護者になると言っておきながら、自分は一体何をしているのか。

「翔」

すっかり翔の位置となったコタツの左側。

リビングの奥の部屋に近いその席を、翔は気に入っているようだった。克夫はそこに翔を座らせると、まっすぐ見据えて彼の名を呼んだ。

早朝のまだ温まっていないコタツの席に、ちょこんと座っている翔の肩がピクリと動いた。

克夫はその向かいに座り、翔を見つめた。

やはり何かを恐れるように、翔は縮こまって克夫をチラリと見ている。

「翔？」

先ほど怒鳴ってしまったことが効いているのかもしれない。

克夫は努めて優しい声を出し、もう一度呼びかけた。

「……は……は」

小さな声で返ってきた言葉は、震えていた。

克夫は舌打ちしたい気分になりながら、何とか台詞を絞り出す。

何がお前をそうさせているのか。

人に嫌われないように生きているが、翔は、翔自身は何かしたいことはないのか。

「翔は、これからどう生きるつもりなんだ？」

「……これから、僕がどう……？」

翔は、今にも泣き出しそうな顔をしている。

捨てられるとでも考えたのだろうか。今すぐにでも、「俺が可愛い孫を捨てるわけねえだろ！」

と怒鳴って抱きしめてやりたくなるが、それでは駄目だ。

克夫には分かった。世の中の常識を言葉や理屈で説明したって、心のあり方を変えることなんてできない。すぐに翔はその言葉を疑って、自分にもそれは当てはまるのだろうかと思ひ、大人の顔色を窺う行動をしてしまう。

それでは今までの「嫌われない」生き方と何ら変わらないのだ。

これからの長い人生。

今ここで中途半端に克夫が慰めても、それはこの場をしのぐだけにしかない。だから、きちんと彼の口から聞かなくてはならない。彼がこうなった理由を。

そうすれば、どこまでも一人で頑張ってしまう彼の手助けをすることくらいなら、克夫にだってできるはずだ。

「……話を、前の生活のことを聞かせてくれないか？」

恐る恐る口を開いた克夫に返ってきたのは、沈黙。

翔は小さくなって座っている。若干顔色が青く、やはり、翔の母親は碌なことをしていなかったのだと分かった。そして今、その記憶を引き出すという苦行を翔に負わせていることも、克夫は理解している。

だから急^せかすことなく、じっと待った。

しばらくして翔は顔を上げ、ポツリポツリと語ってくれた。

気づいたときには父親がいなかったこと。

母親が自分を育てるために、毎晩遅くまで働いていたこと。

そんな母を助けたくて、少しでも喜んでもらえるように家事や勉強を始めたこと。

でも、そんな翔に母親は無関心であったこと。

いくら頑張っても褒めてくれなかったこと。

悔しい。悲しい。寂しい。そんな感情が渦^{うず}巻^まいていたことだろう。

翔の小さな身体は終始震えていて、それでも何度も嗚咽^{おえう}を吞み込んで泣き出さないようにしているのが分かった。最後のほうは、もう見ていられなかった。

「……おかあさんは、僕が嫌いだったんです。僕はそれに気づいちゃって……。なんで？　つてきいたら、おかっ、おかあさんは、顔がっ……きらいだって。ぼくのかおが、きらいだって……」

気づけば、克夫の目から涙が溢れていた。

「馬鹿が……馬鹿野郎……」

克夫は翔をギュッと抱きしめた。

母親から嫌われて傷つかない子はいない。それどころか、無関心に放置された上、顔という自分ではどうしようもないものを否定されて。

こんなものを一人で背負っていたなんて。

つらかったろう。人を信じたなくなるだろう。なのに、いつも微笑んで、顔を隠すことで嫌われないようにしようとした。

心が壊れていても不思議じゃなかった。

この子は本当に強い子なんだ。克夫は改めてそう思った。

「それで顔を隠したがつてたのか」

「だって……僕の顔は気持ち悪いでしょ？」

きつと今、克夫はひどい顔になっているだろう。客観的に見て絶対ジジイである自分のほうが気持ち悪い。でも、それを言ったところで意味がないことくらいは分かっていた。

「どこが？　かわいいじゃないか」

みっともなく涙を流しながら、克夫は少し乱暴なくらいに翔の頭を撫^なでた。

「翔。顔なんて、その人の一部にすぎないんじゃないか？　たとえば、俺がある日いきなり整形したところで俺は俺だ。俺がどんなに着飾^えったって俺は俺だ。それは分かるな？」

翔が小さく頷いた。

「じゃあ、綺麗な姉ちゃんたちがいるとしよう。その中には、整形して着飾^えった俺を見て好きだと言^いう奴もいるかもしれねえが、俺の変わりように呆^あれて嫌^{きら}う奴もいるかもしれねえ。あるいは、整形とか関係なしに、俺の性格が好きだと言^いってくれる人が現れるかもしれねえ」

克夫は息を吸った。

「でも、俺は俺だ。何も変わらねえ。人に好かれようが好かれまいが俺は俺だろ。そっだ、人の好き嫌いなんで、何がきっかけになるか分からねえ。だから、お前は間違っちゃいねえよ。顔なんてなくても生きていける。でも逆に、あつたって何の問題もねえんだ」

翔の瞳が揺らいだ。

いや、違う。ポロリと涙がこぼれ出したのだ。目の下の雫が大きくなっていき、やがて弾けるように水滴が落下した。

悲痛な表情を浮かべた頬に、筋ができる。

急にそれが動いた。

「ぼく、がんばったんだ！ 欠点だってプラスにできるって分かってる。芸人さんみたいに顔芸だつてできるかって。でも……こわいんだ！ ぼくには何もないんだ！ だから、きらわれるのがこわいんだよ……！」

克夫は顔をしくちやにして笑った。

「ぼっかやろう。俺がいるじゃねえか。顔なんて別に俺にや何の判断材料にもならねえよ。孫つてだけで可愛いもんなんだからよ」

「意味が分かんないよ。何の説明にもなってないよ、おじいちゃん」

そう言った翔の顔はやっぱり涙でぐちゃぐちゃだったが、にっこりと、それは嬉しそうに笑って

いた。



ふと目覚めると、まだ夜中だった。

昔の夢か……。昼間、サンやセフィスと爺さんの話をしたから、こんな夢を見たんだろう。

あのときから変わらず俺は自分の顔が大嫌いで、でも俺は俺で、信頼できる親友も、家族もできた俺を慕ってくれる美少女メイドさんまでできちゃったのだから、人生どうなるか分からないものだ。

まあ、その肝心のメイドさん——シフォンの心を救ったのは、結局爺さんの言葉だったわけだけど。丸パクリしちゃったよね。俺自身が考えた言葉ではない。でも、あのときの爺さんの言葉は俺の一部となっているのだ。

前世では、友人といえは高校生になってやっとできた寺尾^{てらお}くらいいしかなかったのだから、少しはこの世界に転生させてくれた髭^{ひげ}ジジイ……もとい、髭^{ひげ}の神様に感謝してもいいかもしれない。

一からやり直すという転生は、俺に爺さんの言葉をより深く噛^かみしめる機会をくれたのだ。

眠れなくなってしまったからそのままベッドの上でゴロゴロしていると、二段ベッドの下でサンがもぞもぞ動くような気配がした。起こしてしまったかなと思ったのだが……。

「ごはん！ にげないで！ 僕に食われて……！」

そう叫ぶ声が聞こえたと同時に、ボフツと布団に倒れこむ音が……。寝言かよ!?

どんな夢見て寝ぼけてるんだ。

俺はこらえきれずつい噴き出した。

笑いながら考える。

そうだ、父さんに俺の祖父について聞いてみよう。やっぱり、まずは知ろうとしなくてはな。

4

昨日、お爺ちゃん話で盛り上がって、この世界の祖父のことについて何も知らないやっとな気がついた。

生まれてからのことを思い返してみても、会ったこともなければ話を聞いたこともない。

でも、あの親馬鹿な両親のことだ。

俺に祖父の情報を一切話していないということは、何かしらの事情があるに違いない。俺が知らないほうがいいことなのかな。

いずれにしても、そんなことを電話で——通信機の魔道具で聞くわけにもいかんだろう。

ということで、やっぱり夏休みに、実家へ帰ったときに聞か調べるかすることにした。べ、別

に今確かめることから逃げたわけじゃないんだからね!

夏休みの予定が決まった俺は今、寮の食堂の調理場を借りていた。なぜというツツコミは受け付けない。

今はもうお昼時は過ぎ、最も日が高くなる南中の時間——大体二時くらいだ。まだ夕飯の準備まで時間があるため、おばちゃんたちには食堂を快く貸していただけた。

生クリームに牛乳、砂糖と卵黄を投入して、混ぜる。とにかく混ぜる。

「ふふふん♪ ふんふふん♪」

鼻歌を口ずさみながらも猛烈な勢いで混ぜまくる。そして手をかざしながら、材料を投入したボウルを魔力で覆う。

唱える呪文はもちろん。

「ちちんぷいぷいちちんぷーい! 《冷凍》じゃこらあー!」

冷凍の詠唱だ。さて、これでお分かりいただけただろうか。俺が今作っているのはバニラアイスである。

残念ながらバニラビーンズは調達できなかったため、正確にはただの牛乳アイスなのだが、その名称だとなんかかっこ悪いので、これはバニラアイスと呼ぶ。誰が何と言おうと、これはバニラアイスなのだ。そう、日本人はおしゃれそうな横文字に弱いのである。

とりあえずカタカナにしておけば、かっこよく思える不思議。

でも、あんまりやりすぎると中二病としか言われない。ニホンゴってムズカシイ。
「うん。固まってきたな」

少し離れた場所にいるおばちゃんたちにやたら見つめられているが、まあ、こちらら無償で場を貸してもらっている身分だ。許してしんぜよう。

後頭部やら背中やらにやたらと刺さってくる視線の矢印も、賃料だと思えば安いものである。

俺は心の広い紳士なのだ。

確かに、真昼間から鼻歌を歌いながら料理をしている八歳の男の子って、普通に考えれば目を引くのも分かる。俺だって、休日に材料持ち込んできて調理場を貸して欲しいなんて目をらんと輝かせて頼みこんでくる少年がいたら、思わず観察しちゃうわ。

そんなことを考えているうちに、アイスは完成していた。この間ずっと、頭の中で流していた三分なクッキングの曲を終了させる。

「さーて……と」

そして俺は振り返り、につこり笑った。

まずは俺を見ている視線の主、食堂のおばちゃんたちの好奇心に応えねばならないだろう。借りたお礼もしなきゃいけないしな。

「ご婦人方、試食なさいませんか？」

俺は三歳のときに父さんから受け継いだ秘儀——猫かぶりを発動させ、お坊ちやまスマイルを浮

かべながらおばさんたちに近づくのだった。



「スピネル」

でっぷりと太った男は、一人になった皇帝の間で、部下だった男の名をポツリと呟いた。しかし、彼の呟きに返ってきたのは無言であった。もう何度か繰り返したその行為。

男はぴくりと眉を動かした。

この場で名を呼べば、いつもすぐに現れていた裏組織『影』の長からの返事はない。

それは、先日 of 任務の失敗を意味していた。

——エイズーム王国、公爵家嫡男ウィリアムスIIベリルの排除。

男の計画を進めるのに、エイズーム王国最強の騎士キアンIIベリルが障害になることは確実だった。だから弱みを握るべくその息子の誘拐を企てたのだが、不運なことに、その息子も異常に強い魔力を持ち、計画の邪魔になりそうだと判明したのだ。早いうちにその芽を摘み取っておこうと思い、スピネルに命じたのが今回の任務だったのだが、もうすでに時期は遅かったらしい。

しかも、失敗に加えてスピネルという大事な駒を失うことになった。

「間に合うか……?」